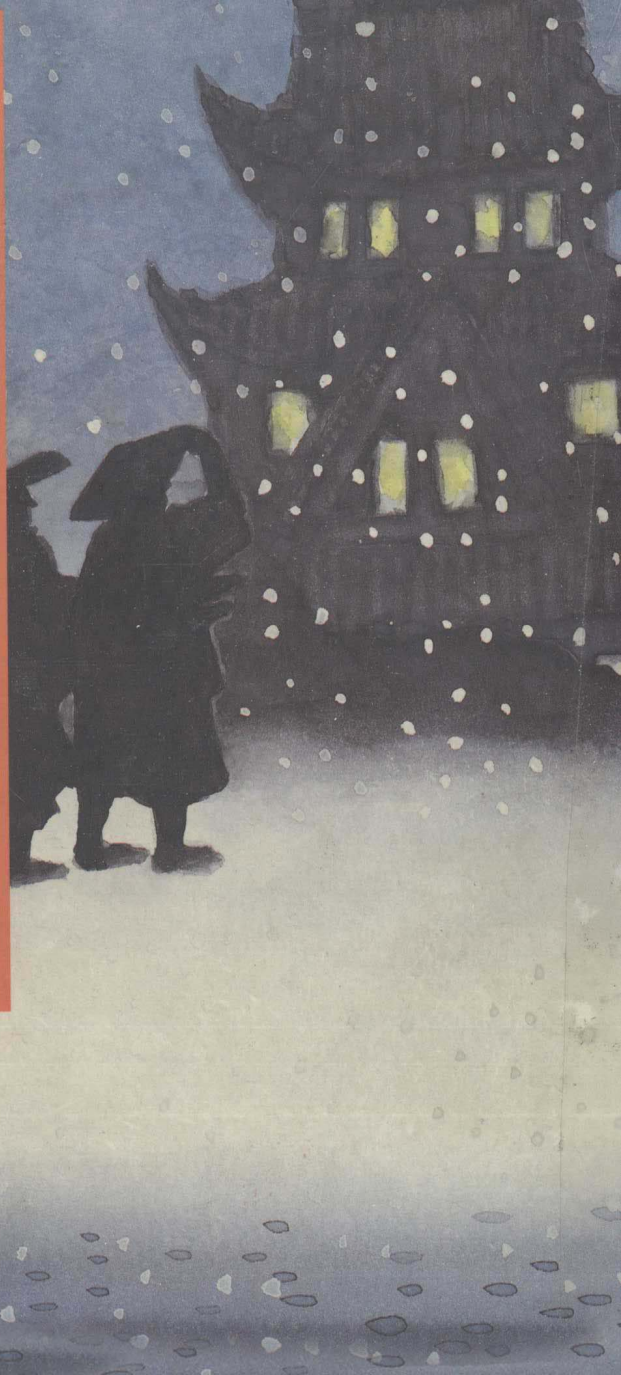


葉菊の露

下

澤田ふじ子



葉菊の露

下

澤田ふじ子

中央公論社

葉菊の露 下

©一九八四 校印施止

定価一四五〇円

昭和五十九年十月十五日初版印刷

昭和五十九年十月二十五日初版発行

著 者 澤田ふじ子

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八―七

振替東京一―三四

ISBN4-12-001347-2

葉菊の露 下 目次

終章	落日	北涯の雪	暗い海	世間の棺	明治の草紙	一穗の灯	春の音	悲雪譜
358	322	285	222	182	138	97	58	5

装帧·插画
加藤正音

葉菊^{はぎく}
の
露^{つゆ}

下

悲雪譜

年が改まって明治二年、郡上八幡では連日、雪が舞った。

石徹白の山間部では、一丈ちかくの積雪だと噂された。さいわいに郡上の八幡城下では、一尺余の雪をみるばかりで、人々の生活に支障はなかった。

それでも朝になると、どの家でも雪除けに精をだしている。町人町も武家町でも、それは同じだった。

お城下はこのわずかな時をのぞいて、終日、ひっそりしていた。陽はおそく昇り、はやくに没する。雪山に囲繞された郡上八幡は、きびしい冬の寒さに身をすくめ、春の到来をまっているのである。

徳永久七の妻雪於は、朝起きると、まず東の東殿山を仰ぐ。麓の赤谷村にある藩の揚屋（監獄）のほうをみるのだ。

——さぞお寒いことでありましょう。わたしどもは元気にしておりますが、あなたさまには風邪などひいておられませぬか。

心で夫に呼びかけながら手を合わせ、今日一日の息災を念ずるのであった。

身体に布団のぬくみがまだ残っている。

それすらもうしわけないと思った。

新政府から旧藩御預けを命じられた夫の久七たちは、ろくに布団もあたえられないときいていた。食事も破子に、少量の冷たい麦飯で、朝晩、中身のないうすい味噌汁だけ。菜らしいものは、隔日の昼に給される塩物一皿だという。

塵紙は十日に四十枚、風邪をひいても薬も与えられない。会津の賊徒に加担した者は死ぬ——といわんばかりの扱いをされている。

「ご藩家の密命をおびて出府させながら、たとえ勢いにまかせて会津まで出むいて戦ったとはいえ、この扱いはあまりではございませぬか。わたしはご家老鈴木兵左衛門さまを、大きく見そこなっておりますわい。時節の流れに身を屈し、天朝さまがたへの遠慮もあらうが、したことが徳川さまにお味方したことゆえ、もう少し血のかよった手心が、揚屋にくわえられてもいいのではありませぬか——」

斎藤造酒之助の母盈は、雪於と顔をあわせると、胸裡の憤懣をぶちまけた。

鈴木兵左衛門など重臣たちに面会を求め、揚屋の処遇改善を要求しかねない勢いであった。

兵左衛門は昨年十月、重險と改名していた。同月、行政官通達があり、天皇の御諱睦仁と同字を用いてはならないとされたからだ。彼の実名は重睦といった。

このころ新政府は、各藩に新しい藩制の施行をもとめ、家老、用人などの職制を廃させた。郡上藩でも、執政、参政、公議人の職制をもうけ、新時代に対応するため、家柄に固執せず人材を

選ぶとしたが、公選の結果は、執政鈴木重險、天方直紀、佐治求馬、参政は貴田孫左衛門、綾部誠一郎、公議人は重險が兼務するといふものだった。彼らを悩ませているのは、揚屋に謹慎させている旧凌霜隊員たちであった。

新政府に対して、郡上藩がひそかにとった二股政策の企図は、あばかれなかったものの、旧凌霜隊士の扱いに、鈴木重險は苦慮していたのである。

すなわち、新政府から隊員たちは旧藩に御預け、厳しく謹慎させよとの命令をうけていながら、その処遇を厚くすれば、新政府の意に背くことになり、酷く扱えば、隊士派遣の真相を暴露されないかと懸念されたのだ。

新政府に反抗した東国諸藩には、すでに処分が発せられていた。

会津藩主松平容保と養子の喜徳は、死一等を減じて永預け、封地は没収。他の藩は、藩主の交替と削封、転封ですまされていたが、政府内部に厳罰意見もあり、首鼠^{しゅそ}兩端^{りょうたん}をとった郡上としては、慎重を期さざるをえなかったのである。

もっとも、今度の戦争は、三百余年にわたって〈悪政〉をつづけてきた徳川幕府をたおし、天皇親政による統一国家をつくるためといい、庶民のための善政、御一新を標榜する新政府は、天皇の慈悲深さと寛大さを示す必要があった。苛酷な処分は避ける方針をとっていた。

いまだ、郡上藩の首鼠兩端がわかって、黙ってみすごすはずだ。事実、藩を代表して政府に出仕する諸藩公議人のなかで、秋田藩公議人初岡敬治などは、会津に援軍をおくった郡上藩の名をあげ、なんらかの処分を求めたが、政府首脳はうなずかなかった。

寛典処分をおこない、穏便に維新政府を軌道にのせる。

これが、新政府の基本姿勢だった。

ところが、それをいいことにして、朝敵に加担した一味を寛大に扱えば、政府内部で嚴罰を主張する人々の気持ちをさかなですることになる。右顧左眄しなければならぬ苦しいところだった。

「わし個人としては、朝比奈どのや尾嶋左太夫たちをあたたかく迎えてやりたい。坂田林左衛門や速水小三郎どのを揚屋に入れ、罪人なみに扱うとはもつてのほかじゃ。しかしながら、彼らを脱藩者として、太政官に届けでたつじつまだけは、なんとしても合わせねばならぬ。新政府は各藩に密偵を放って、恭順のありさまを調べさせているときく。げんに不審な者が、お城下に入っているとの報も聞いている。政治というものは、小の虫を殺して大の虫を生かす。所詮、むごい気持ちをもたねばおこなえぬ。一つ嘘をついたために、さらに苛酷な嘘をかさねねばならぬのじゃ。関わりをもつたものは、えらい難儀なめにあらうことになる」

重險が、参政の綾部誠一郎にもらした言葉であつた。

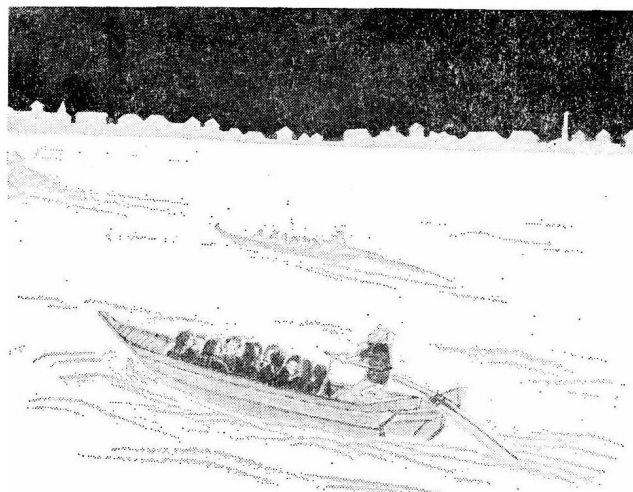
ことを徹底させるため、重險は凌霜隊員の留守家族に給していた扶持米まで停止した。

江戸家老の朝比奈藤兵衛は、新制度の施行と同時に、朝敵会津に多人数の藩士を送つたとして、二千石の藩老から、七人扶持の平藩士に格下げされていた。

未曾有の処置に、藩内は啞然とした。

しかも朝比奈家存続のために、朝敵——の長男茂吉は廃嫡、弟辰静があとをつぐという条件のものであつた。

新政府の諸藩公議人は、江戸家老の朝比奈藤兵衛が、援軍の派遣を決裁したとみている。



郡上藩は対外的に、なんらかの処分をしなればならなかったのだ。

重臣からしいてその人物をあげるとすれば、それはやはり、佐幕論者として徳川家への忠誠をかくさなかった朝比奈藤兵衛におちついた。

「鈴木どのご処分、わしは決して怨みに思うておらぬ。わしの立場なれば、腹でも切って自らを処さねばならぬところだが、それを行えば、家中にさまざま紛糾をおこすことになる。また新政府から不審をまねき、家中取締不行き届きとして、幸宜さまにご迷惑がかかる。生きて恥辱の余生を送るのも、藩老についていた者の使命と、わしは思っている。鈴木どのにくれぐれもよしなに伝えられたい」

昨年の十月上旬、国許から江戸藩邸にもうし渡しをはこんできた鈴木家用人の馬場九右衛門に、朝比奈藤兵衛は淡々といった。

そればかりか、これから鈴木重隆が、人のそしりや非難をあびながら、藩のきりもりをして

いく苦渋を斟酌しんしゃくした。

自分は敗れた者として、隠退の平安を得る。

だが鈴木重險には、それがいいことをのべたのである。

「そうか、朝比奈どのは万事、おとなしく国許の処置をうけてくださったか。わしもその気持ちや、赤谷村の揚屋で謹慎する者たちのことをだてには思わぬ。うわべはどうあれ、一蓮托生の気持ちじゃ」

鈴木重險の生活は、それから質素をきわめるようになった。

揚屋の生活を考え、粗食にただけでなく、藩庁に出仕するときとはともかく、家では寒中でも足袋をはかず、下着も一枚わざと減らした。

風呂も十日に一度とし、部屋に火桶もおかず、布団も重ねなかった。彼らの辛苦に、自分を同化させたのである。

「これぐらいのこと、あれたちの苦勞を思えばなんでもない」

重險の心中には、火もあたえられない揚屋で、この寒さにふるえている旧凌霜隊員たちの姿が、いつも揺曳ようえいしていた。

昨年十月十二日、猪苗代を出発した凌霜隊員たちは、十二日ばかりで江戸の千住に到着、そこで総督府から、旧藩御預けのもうし渡しをうけた。郡上藩江戸屋敷から、身柄うけとりのため、小者七十人をつれて戸川貞右衛門、乙部吉十郎など六人が待機していた。隊員の半数は江戸組である。

当然、東京と改名された江戸での謹慎を考えていた彼らは、騒然と抗議の声をあげた。だがそれは、戸川貞右衛門の苦渋にみちた顔をくずさせはしなかった。

二十四日の夜、隊員をのせた伝馬船は、千住川から隅田川を下り、品川沖にでた。

肌を刺すような寒風が、暗い水面をわたっていく。誰もが江戸（東京）の灯を、なつかしくみている。

速水小三郎に、一命を会津ですてるつもりでございます——といった朝比奈茂吉の目は、くらく翳（かげ）ってまたたきもしなかった。

矢野原与七は、『心苦雜記』でこう書いた。

——千住より品川迄の途中、左の方は向島の風景、右は名高き浅草寺、駒形堂を跡に見て、御厩川岸を打越せば、はるかに見ゆる両国は、軒をならべし茶や茶やに、三筋の音も耳にこたへ、（中略）かどづけの三筋の音迄、川水に響き、気もうくやうに見えにける。それに引き替へ皆々は、勅勘の身となり大きな声も出来ぬとは、思へば思へば情なき身分なりと、一統たんそくなり。

（中略）追々、生れ故郷を跡に見て、運の尽きとはいひながら、今一度徳川家の繁昌を希ふ。然れども、今度東京と御改めになり、皇国の英だん家集合して周旋あるからは、定めしよき土地になるべし。何れにても日本の富む事なれば、たれかこれを彼是いふものあるまじ。今度諸家の義兵脱走も此の事よりおこりしならん。さすれば残らず国を富ます事故、つまり勤王ならん。

『心苦雜記』をよむわたくしの心に、矢野原与七に代表される凌霜隊員たちの国を思う至純な気持ち、ひしひしと伝わってくる。

彼らがこんな思いで隅田川を下っていたときからかぞえ、六十九年後の昭和十二年七月、不幸

な日中戦争がおこった。

当時、郡上八幡では、維新凌霜隊の不屈の精神をつぎ、国家に有益な人物を育てようとして、浅井弁真、楠木章氏らの手で、八幡城二の丸に「凌霜塾」がつくられた。

宗広力三、山下勘治、辻村徳松氏らが教育者として参加、二年後の昭和十四年三月、日本の国策とした満蒙進出に呼応して、北満（中国の吉林省）に開拓団を送ることになった。

郡上凌霜隊開拓団がそれで、昭和十八年には百九十八戸、八百六十余人が入植した。

昭和二十年八月十五日、日本の敗戦によって、開拓団の人々は、悲惨な状態でかろうじて祖国にひきあげてきた。

わたくしのなかでは、凌霜隊の人々の気持ちと、郡上凌霜隊開拓団の人々の思いが、どうしても一つに重なってくる。

開拓団の人々は、日本の国を富まさんとして朔北の地にむかった。それが誤った侵略の結果であつたにせよ、至純さにおいて、凌霜隊士たちと同じであり、その最後の哀れさに、わたしは人間の悲壮美をみるのである。

品川沖に到着した凌霜隊員は、淡路帰りの千石船にのせられた。

翌二十五日は、そのまま品川沖に停留した。

二十六日、早朝に出帆、浦賀に停泊。翌日は伊豆長津留湾に停泊したが、二十八日、夕刻に出帆した船は、遠州灘にさしかかって大風におそわれ、船底が破損、沈没の危険にあい、翌二十九日、近くを通りかかった三隻の船に救助されるのである。

なにもかもが不運にできていた。

三隻の船は、波浪のため連絡がとれないまま西にむかい、三十日、前後して伊勢の賢浦や鳥羽に到着した。

尾州船に救助された尾嶋左太夫、山田熊之助、武井安三、小泉勇次郎ら四人と、護衛の金井与一郎たち十一人の計十五人は、鳥羽の港で一日の静養をとり、伊勢路をたどって大垣から長良川ぞいに北上、十一月八日、ひそかに郡上八幡に入り、赤谷村の揚屋に収容されている。

他の二船に救助された一行は、彼らよりはるかに遅れ、十一月十三日、桑名宿でようやく郡上から派遣されてきた護衛隊にむかえられ、江戸からの人数と合わせて、総勢百二十余人となり、十四日昼すぎ、川船十二隻に分乗、美濃の大垣にむかった。

大垣は水門川で桑名とむすばれている。

大垣に到着したのは、夜の十時すぎだった。

先駆けした護衛隊士によって、竹島町の本陣と、本町の脇本陣に宿泊の用意がととのえられ、一部は町屋に宿をとった。

翌十五日は早朝の出発となった。

西にのぞむ伊吹の山塊は、すでに雪をかぶっている。

伊吹おろしが、長良川にそって北上する一行に、はげしく吹きつけてきた。

北につらなる山々も白く装われ、稲葉山も雪をのせていた。

国許で生まれ育ったものには、懐かしい眺めであったが、江戸組の隊員たちには、見なれない寂寞とした光景に思え、遠く異郷の地にきた心地がした。

「はじめの眺めで心細かろうが、ここが美濃で、北山のむこうが郡上八幡にあたる。この地こ

そ、おぬしたちの郷国でございますぞ」

坂田林左衛門が、江戸組のみんなを励ましてまわった。

朝比奈茂吉も励まされる一人だった。

彼は江戸で生まれ、まだ一度も国許に入ったことがなかったのである。

——そこでどんな謹慎の生活が待っているのか。

大きく息をすい、黙々と歩む速水小三郎にちらっと目を走らせたとき、前方で休止の聲がひびいた。

場所は中仙道美江寺宿のあたりだった。

「めしだ、めしにするぞ——」

声にうながされ、道端に腰をおろした。

朝、宿を発つとき手渡された竹皮包みを開き、みんながにぎり飯にくいついた。

だが、凌霜隊員の誰もがおちつかない。それは一行を待ちかねたように、たくさんの町駕籠が、前方にたむろしていたからであった。

「ご貴殿がたには、ここからあの駕籠にのっていただきたい。岐阜からやとってきた辻駕籠でござるが、囚人駕籠のつもりでござる。これもお上の命令ゆえ、悪く思われるな」

出府組には知人も多い目付役の伊奈弥十郎が凌霜隊員たちにい、彼らを駕籠にのせると、外から縦横に荒縄をかけわたした。

誰もが憮然として口をきかなかった。

速水小三郎はこのとき、小脇に小さな風呂敷包みをかかえていた。